お盆

浄土真宗本願寺派
光徳寺前住職　藤田　徹文

お盆は大切な仏教行事ですが、「盆」の意味を知る人は少ないでしょう。「盆」の原語は「ウランバナ」（サンスクリット語）を、漢字で「盂蘭盆」と書き、省略したものです。

「ウランバナ」は「倒懸」と漢訳され、「逆さまに吊るされた苦しみ」という意味です。これが私たちの人生の姿なのです。

お盆はお墓に参り、先人を偲ぶと共に、「大切なこと」を聞き考えさせていただく仏事です。「大切なこと」とは、仏陀（目覚めた方）の考えを聞いて、私も目覚めて生きるということです。

仏陀となられたお釈迦さまが目覚められたのは、自らの「いのち」と、すべての「いのち」の存在を実現してくださっている「大きなはたらき」（法）なのです。

私たちは他の人のことは見えても、自分のことは見えていません。自分がわからないままに生きるから倒懸の人生になるのです。自分に体力や能力があれば、一人でも生きられると、私たちは思い違いをするのです。どれほど体力・能力に恵まれていても、それらを出せるのは、出せる状況があたえられているからです。

私たちが自分の力を出しきって生きられるのは、私の思いもおよばない多くの「いのち」や「もの」とのつながり（縁）がひとつになって「大きなはたらき」（法）となり、すべての「いのち」の存在を実現し、個々の力を出せる状況を与えてくださっているのです。

この「大きなはたらき」を、お釈迦さまは「縁起の法」と示し、親鸞さまは「自然（じねん）の法則」と教えてくださいました。

「自然（じねん）」とは、自ら私を私たらしめてくださる「はたらき」、私たちの自分中心の思いや計らいが全く入りようのない「はたらき」（法則）ということです。

私の思いや計らいで、私は私として今ここに存在しているのではなく、多くのご縁の「はたらき」（法）によって、世界中にただひとりの私として生かされて生きているのです。

私は私の思いや計らいをこえて、過去・現在・未来にもただひとりの存在として生かされているのです。私を生かしてくださる「大きなはたらき」（法）の真ん中で、恵まれた力を出しきって精いっぱい生きればいいのです。他の人と比べることは全くないのです。

「青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光」（『阿弥陀経』）こそ、本当の「いのち」のあり方です。雑色（うるわしい色）はその雑光（うるわしい光）を輝かせて生きればいいのです。

この「大きなはたらき」（法）に目覚めることなく、自分の小さな思いだけで生きようとするから「逆さまに吊るされた苦しみ」（倒懸）の人生になるのです。

お盆は、私がお釈迦さまの教えに遇い、目覚めさせていただく大切な仏事なのです。